

『天台諸文類集』から見た宋代天台教学の諸課題

林 鳴 宇

『天台諸文類集』⁽¹⁾は、四明沙門如吉が北宋中期に編纂した、天台教学の提要集成である。天台教理を、経体、経王、被接、寿量、観法、教証、随縁、四土、二空、習気の十項に分類し、智顗已来の天台諸師の著述から関連する内容を抜粋し、それぞれの項目を説明したものである。

『天台諸文類集』は、宋代天台教学の水準を知るに絶好の資料であるものの、残巻かつ未整理であるため、従来、その重要性は、ほとんど注目されてこなかった。

小論では、『天台諸文類集』の成立背景、そして、それが後の仏教界に及ぼした影響等について論じる。

一、『天台諸文類集』の成立背景

『天台諸文類集』は、金沢文庫所蔵本及び続蔵経が収録した別系統の第十巻のみが現存する。金沢文庫所蔵本は天下の孤本であり、巻七、巻八が散逸したものの、巻一、二、三、五は残巻で、巻四、六、九、十が完本である。また、金沢文庫所蔵

本の落丁であり、曾て柳瀬福市の所蔵と見られる序文や目録の部分は、現在その所存は不明である。一九七九年、金沢文庫発行の『金沢文庫資料全書』第三巻は、現存部分のみを翻刻し、柳瀬所蔵の序文や目録を収録できなかった。幸い、一九三七年に三好鹿雄は、金沢文庫所蔵本と柳瀬福市の所蔵部分を組み合わせ、それを抄録したものが東京大学東洋文化研究所に所蔵されるに至ったため、下記の通り、『天台諸文類集』の編集目的を確認することができた。

(前文佚……)者、趨規矩而聖人之室斷可造矣。然而去就不敢自能、以人盛愛而共之。夫為人之所愛者、莫盛于至公、至公而天下共也。不以至公取詩書、雖孔子亦無所以容於世爾。所以推公而治諸此者、孰不共哉、規矩而已矣。時大宋熙寧四季歲在辛亥八月初吉日。

如吉の序文は、後半部分しか残っていないものの、その編集の目的は明らかである。すなわち、天台教学の優劣取捨は、自ら勝手に判断するのではなく、教団全体が認めたものに從わなければならない。『天台諸文類集』の編集も、天台教団

が公に認めた内容を選び、「規矩」の書、すなわち天台教理の基準書として著したのである。その作成背景について、以下の三点であると考えられる。

1、宋初における天台教団の教理論争

十一世紀初頭、天台教団では、教理を巡って激しい内部論争、いわゆる「山家山外の論争」が生じた。

この論争の結末は、『佛祖統紀』などでは、

備衆體而集大成、闢異端而隆正統者、唯法智一師耳。……今浙河東西號為教覺者、莫不一遵四明之道。²⁾

と、天台中興の祖である知礼に軍配を上げたが、知礼の当時では、教理認識をめぐる内部論争は、天台教団全体に大きな衝撃を与え、混乱を招いたに違いない。その後、知礼は弟子の育成に力を注ぎ、神照本如、南屏梵臻、広智尚賢などの優秀な弟子たちが次々と勢力を拡大し、知礼教学の基盤を固め、その正統性がようやく認められたのである。拙著『宋代天台教学の研究』の中で言及したように、知礼教学の正統性を樹立し、最初に著書してそれを高く評価したのが知礼の孫弟子の継忠（一〇二二〜一〇八二）である。『天台諸文類集』の編者である如吉は、継忠の同門で、ともに広智尚賢の門弟である。知礼が亡くしてから約四十年後の熙寧四年（一〇七二）、知礼教学の継承者である如吉が、天台教理の「規矩」の書を編集したことは、継忠の行動に呼応し、知礼教学を当時の天台教

団の正統な地位までに押し上げようとしたと考えられる。

2、天台典籍の入蔵

慈雲遵式の文集である『天竺別集』巻上の「天台教随函目錄并序」によれば、天聖年間、遵式は、天台典籍の入蔵を宰相の王欽若に頼み、後に、三十六種約百五十巻の天台典籍の入蔵が叶った。³⁾

『景祐録』巻十七の「天聖四年」条にも、

内出天台智者科教經論一百五十巻、令三藏惟淨、集左右街僧職、京城義学文学沙門二十人同加詳定、編錄入蔵。

と、天台の典籍が確かに中国初の官制大蔵經『開宝藏』に収録されたと記した。

隋唐兩代の天台祖師の著した典籍が入蔵できたことは、天台教団の教学に印可を与えたに等しく、遵式は入蔵できた典籍について、

然此教文、雖部逾於數十、而卷不滿二百、三世仏法、一家義宗、總括要挙、亦已備矣。⁴⁾

と語っている、これは、天台の祖師たちが創出した教学思想が、他宗に凌駕したとの自負から発した見解にほかならない。実際に、現存する『天台諸文類集』を確認したところ、知礼、智円の著述したものを除けば、そのほとんどが、入蔵典籍の内容からの抜粋である。如吉にすれば、天台教理の「規矩」の書を編集するに際し、入蔵した天台典籍の信憑性は動

『天台諸文類集』から見た宋代天台教学の諸課題（林）

かし難く、かつ天台教団が公認していることから、それを編集の基準にしたと考えられる。

3、時代の趨勢

文の重要部分を採集し類書の形式にする典籍は、漢籍では、唐の『初学記』、『芸文類聚』があり、仏教文献では、梁の『経律異相』、唐の『法苑珠林』、宋の『義楚六帖』がある。ただし、中国の天台教団においては、如吉の『天台諸文類集』が最初である。

南宋の宗曉が、所編の『四明尊者教行録』巻六に、『天台諸文類集』の古板の序、『記四明門下纂成十類』⁵を収録した。これによると、天台典籍より要点を抜粋し「類集」として編集したのは、初学者の理解を助けるためであった。当初、知礼の弟子の自仁首座が、知礼の講義を聴き、その引用した典籍の要点を五項目にまとめたのが、「類集」の原型である。そして仁岳が二項目を加えた。さらに仙都の聰師が三項目を加え「十類」にした。その後、仏慧の才師の増補、如吉の再編が行われ、このように前後五人の編纂により、天台教学の大事を十項目にし、膨大な天台典籍の中から相応の箇所のみを選び、それぞれの項目を説明したのである。

これは、宋初の天台教団における「十類」の沿革であり、精微、複雑の天台教学を簡素化し、普及しようとした第一歩と言える。禅宗の勢力が日々拡大していた宋代において、天

台僧にとつて、仏教界で如何に地位を確保するかは大きな課題であった。「不立文字」、「教外別伝」などの明快な宗風を以て民衆の心をつかんだ禅宗に対し、宋代における天台教学の簡素化は必然の流れであった。

しかし、天台教学は、その性質上、簡略化できるものではなかった。上記の序文に見られる、広智尚賢の「十類」への批判を含めた再版者の指摘によれば、尚賢はかつて、天台の教理を「十類」にまとめることは得失半ばするものであつて、初学者にとつては便利な手引き書であるものの、それを勉強するだけでは到底、天台の奥義を知ることとはできないと酷評した。そして、それにもかかわらず、現在の天台寺院の多くは、『天台諸文類集』を最も重要な文献として解説し、その原典である天台典籍を顧みず、本末転倒の極まりであると警告した。

この序文には、三好鹿雄が抄した『天台諸文類集』の序の内容は見えず、その語調から、如吉が当初作した序ではなく、後の再版時に加えられたものであると考えられる。また、序文において、広智尚賢の懸念を取り上げ、初学者に示すことは、当時の天台教団が教理を重視していない事実、『天台諸文類集』の所録は天台教理研究の入り口に過ぎない点を示唆したものである。

二、『天台諸文類集』が後世に及ぼした影響

1、如吉の編集態度について

『天台諸文類集』は、前後五人の天台学者に亘り編集が続けられ、如吉が以前の内容を添削し、その最終版を作成した。彼の取捨選択の特色は、以下の三点である。

① 知礼教学の正統性の主張

四明知礼の没後、延慶寺を主宰したのは、弟子の広智尚賢である。如吉は、尚賢の弟子であつて、知礼の直系の孫弟子である。彼は『天台諸文類集』を編集する際、前述のように、智顗、湛然の著述の要旨を採用したほか、知礼が著した五小部の疏記や『指要鈔』などの内容も「十類」の説明として広く採用した。その理由は、祖師である知礼の思想こそが智顗湛然以来の天台教学の正統であり、「規矩」であると考えたからにほかならない。知礼教学の正統性を主張する点は、同門の継忠も同様であつた。この時代から築かれた知礼教学の正統な地位は、後の天台教団に君臨した知礼教学の基盤となつたのである。

② 智円の教学の重視

「山外」と呼ばれた智円は、『金光明經玄義』の広略問題や『請観音經疏』の解釈問題などで、知礼と論争を繰り返した。彼の教学も、正統派である知礼と相反するものと言われている。

『天台諸文類集』から見た宋代天台教学の諸課題（林）

た。

しかし、『天台諸文類集』には、知礼には及ばないものの、智円の学説も採用された。智円の『十不二門正義』、『金光明經文句索隱記』の説は、知礼の『十不二門指要鈔』、『金光明經文句記』と比較しながら取り上げられたし、智円の『維摩經疏垂裕記』の引用も多く見られる。このことから、如吉は、『維摩經疏垂裕記』が智顗の『維摩疏』の末注書としての地位を有することを認めていたと考えられる。そのほか、如吉は、『経体』の説明において、智円の『請観音經疏闡義鈔』の「靈知為体」説をも用いた。『請観音經疏闡義鈔』はかつて、「理毒性悪」の論争で、知礼の猛烈な批判を浴びた書物であるため、知礼の直系としての如吉が、客観的な立場で智円の著書の内容を選別した面も窺える。

智円の教学は、後の神智従義などの天台学僧までもにも影響を及ぼした。彼らの著書の中では、天台教学の難解な部分について、必ず智円や知礼の学説を取り上げて再確認する傾向が見られるのである。

③ 新しい説明方法

『天台諸文類集』のように、天台教学を分かりやすく説明するため、教学の主な課題を横に、経体、経王、被接、寿量、観法、教証、随縁、四土、二空、習気の十項目に分け、縦に、天台典籍の関連箇所を抜粋し、それぞれの項目に説明を加え

『天台諸文類集』から見た宋代天台教学の諸課題（林）

た手法は、ほかの宗派には見られず、斬新である。これは隋唐代によくある、經典に直接注釈することで教理課題を究明する方法と異なり、天台関連の經疏から生じた教理課題を立体的に再構築し、それを関連づけることで教理課題を究明するのが特色である。

広智尚賢が本末転倒だと批判したこのような手法は、後の宋代天台の諸師に大きな影響を与えた。可観の『山家義苑』、『竹庵草録』、與咸の『復宗集』、善月の『山家緒余集』、普容の『台宗精英集』などは、おおむね『天台諸文類集』のような課題型の論証手法を採用した。

2、義天の『円宗文類』について

『大覺国師文集』巻第一に収録した「新集円宗文類序」によれば、『円宗文類』二十二巻は、義天が高麗王の勅命を受け、新学の僧侶のために、華嚴宗の祖師たちの著書より重要な章節を抜粋し、編集してできたものである。また、『円宗文類』という題も高麗王の賜名であるとした。

しかし、義天の『新編諸宗教蔵総録』の末尾には、如吉の『天台諸文類集』を『天台文類』と略称しており、『円宗文類』という題名もこれに根拠したと推測できる。さらに、現存する『円宗文類』の残巻を確認したところ、巻一四を「諸文行位類上」とし、巻二二を「讃頌雜文類」とした点も、『天台諸文類集』の分類法の影響ではないかと考えられる。

如吉の『天台諸文類集』は熙寧四年（一〇七二）に初版された。「十類」の分け方は、かつては不評であったにもかかわらず、編者の序文にも記されたように、これを天台一宗の「規矩」の書と指定したのである。「新集円宗文類序」にも、その編集目的を、高麗華嚴宗の学僧の教理認識の誤りを正すためであるとした。両者の目的は近似しており、『円宗文類』の編集は、『天台諸文類集』の影響を受けたものであるとも考えられる。

3、善月の『台宗十類因革論』について

善月は広智系の第六代弟子で、その『台宗十類因革論』が如吉の分類した十項の課題を再配列、再検討したことも注目すべきである。

塩入良道が、『台宗十類因革論』は、善月が『天台諸文類集』の録する諸文をもとに改めて統合し、自説を述べたものであると指摘したものの、善月がどのように自説を展開したかについては論及されておらず、課題として後世に残した。⁽⁶⁾

『台宗十類因革論』の序文は、前半が散逸したため、「経体」、「経王」、「随縁」、「習気」、「観法」の五項の關係は不明だが、現存する後半の序文では、その他の項目の關係を次のように示した。

「観法」から「二空」に移行できるのは、「二空」は観法だからである。「二空」では、即空含中がゆえに、「被接」のもの

となる。「被接」は教道の所有であり、教道は証道に至るため、「教証」になる。「教証」は権より実への過程であり、その究極の実は真因の始まりであり、因あれば果あり、果人のことを示す「寿量」に入る。果人は身に依るがために、三身は必ず四土に伴う、ゆえに「四土」となる。「四土」の究極は常寂光土であり、寂光は理性であるため、再び「経体」を尊ぶ。このような「十類」は異なるものであるが、循環して生起することが同一の教え（一理）である。

善月が展開した自説の最も重要な点は、十項の課題の順序の再配列である。『天台諸文類集』では、「十類」を単に経体、経王、被接、寿量、観法、教証、随縁、四土、二空、習気の順とならべ、その間の関連性もそれほど意識されてこなかった。しかし、善月は『台宗十類因革論』で、その順序を経体↓経王↓随縁↓習気↓観法↓二空↓被接↓教証↓寿量↓四土↓経体と改め、各項が前後に関連するような円形にした。「四土」を十類の末尾におくことも、宋代の天台浄土教の影響を受けたものであると考えられる。

三、結

如吉の『天台諸文類集』は、天台関連の経疏から生じた教理課題を立体的に再構築し、その関連性によって教理課題を

究明しようとした。天台教学を分かりやすく説明しようとしたことのような研究法は、従来見られない斬新な手法であったため、多くの批判を受けた。しかし、後の宋代天台の諸師のみならず、高麗の義天にまで大きな影響を与えたことなどにより、宋代天台教学を一層明らかにするためには、ほとんど研究されてこなかった本書をさらに解読する必要がある。

- 1 『天台諸文類集』は、拙著『天台文類・天台法数校釈』（上海古籍出版社・二〇〇五年）参照。
 - 2 大正蔵四九卷一九四頁中。
 - 3 天聖四年（一〇二六）八月のこと。『天竺別集』巻下「思悟遺身贊」（統蔵一〇一冊百五十三頁上）を参照。
 - 4 『天竺別集』巻上、「天台教随函目錄并序」（統蔵一〇一冊百三十二頁下）を参照。
 - 5 大正蔵四六卷九一六頁下。
 - 6 『金沢文庫資料全書』第三卷、二一四頁。
- 〈キーワード〉 宋代天台 知礼 如吉 智円
（駒澤大学非常勤講師・仏教学博士）

cally through the entire text of the *Fahua wenju*, then one cannot say that this is the case, for it must be admitted that there are instances where the application is unsuccessful. When it comes to this kind of scriptural exegesis, the author thinks that perhaps we should be satisfied with simply presenting the basic idea and providing a few exemplary applications on behalf of the reader. In point of fact, interlinear sūtra commentaries consist almost entirely of analytic parsing of sūtra text and explanation of the meaning of individual words.

Finally, the author points out that three of Jizang's four interpretations are not only presented as a discrete set in Huijun's *Dacheng silun xuanyi ji* but that the beginnings of the 'unlimited interpretation' can also be seen there. Moreover, the form of interpretation in Jizang's system that properly corresponds to 'interpretation from the perspective of contemplating the mind' is not the 'unlimited interpretation' but, in fact, the 'contemplation of non-arising (無生觀)' that appears in the *Fahua tonglüe*.

17. Song Tiantai Doctrine in the *Tiantai zhuwen leiji*

Ming-yu LIN

The *Tiantai zhuwen leiji* (天台諸文類集) is the collection of explanations of the classified Tiantai Doctrine which Ruji (如吉) edited in the middle of the Northern Song.

The *Tiantai zhuwen leiji* is an excellent source through which we can approach Song period Tiantai doctrine. However, since it represents an unsystematized state of the doctrine, its importance has not been heretofore appreciated. Here I study the background to the formation of the *Tiantai zhuwen leiji*, and discuss its influence on later Buddhism.

18. The *Fahua Xuanyi Shiqian* by Zhanran: Reconsidering the construction process of the text during 758-764

Li-mei CHI